

4・5 歳齡兒童のアタッチメントの特徴と

自由遊び場面におけるストレンジャーへの反応

井上 智穂

【背景と目的】保育園のような場所において、子どもは養育者から離れ、保育士や先生といった大人や年齢の近い子どもと関係を築き、対人世界を広げていく。対人世界を広げる中で出会う人物は誰でも、初対面という状況で新奇性を有している。つまり、新奇な人物との対人関係構築の連続で対人世界は広がっていくのである。本研究では、同年代の兒童が集まった集団保育内に、新奇な人物(以下ストレンジャー)が入室した際に、ストレンジャーに対して見せる子どもたちの反応の個人差がアタッチメントとどのように関連しているのかを明らかにし、アタッチメントが対人方略をどのように規定するのかについて検討することを目的とした。

【方法】大阪府内にあるこども園の4・5歳齡児クラス1クラスを対象とした。協力児は33名(男児21名、女児12名)であり、観察開始時点での平均月齡は、 59.12 ± 3.23 ヶ月であった。午前中の自由遊び時間1時間を使い、ストレンジャーとして、こども園に馴染みのない比較発達心理学研究分野に所属する女性を入室させ、ストレンジャーに対する児の反応をビデオカメラで記録した。また、児のアタッチメントを測るために、紙芝居形式の課題や、担任の保育士によるアタッチメントに関する質問紙調査などを行った。

【結果と考察】児のストレンジャーへの反応の有無とアタッチメントタイプとの関連から、アタッチメント回避型の児は、ストレンジャーに対して関わりを持たないことが示唆された。ストレンジャーに対して反応のあった児のうち、高頻度でストレンジャーに関わりかける児はアタッチメントタイプの中でもアンビバレント型の児が多かった。また、ストレンジャーへの関わりかけ行動の種類ごとに見ていくと、ストレンジャーの注意を引くための行動が多く出やすいのがアンビバレント型の特徴であった。また、ポジティブな身体接触を行いやすく、ストレンジャーの属性を知ろうとする発話や行動が多いのが、アタッチメントタイプの中でも安定型の特徴であることも示唆された。興味深いことに、アンビバレント型はストレンジャーに対して、他の児よりも注意を引きたがる傾向にあったにも関わらず、ストレンジャーの属性については特に興味を持っていないようであった。つまり、アンビバレント型の児ほど、その場にいる大人であれば誰でも自分に構ってほしいが、その大人の属性に関しては興味がなく、その場の自分の注目欲求を満たすために関わりかけている可能性があると考えられた。アタッチメントの特徴ごとのストレンジャーへの反応を見ると、養育者への身体接触が多いとされる安定型の児は、ストレンジャーに対しての身体接触の生起率が高かった。また、養育者を常時自分の元に置いておこうとする特徴をもつアンビバレント型の児は、ストレンジャーに対して注意を引きつけるような行動の生起率が高かった。そして、養育者に対して回避的な反応を見せる特徴を持つ回避型の児は、ストレンジャーに対しても関わりかけ行動が少なかった。このように、養育者へのアタッチメントの特徴を、ストレンジャーに対しても般化している様子が観察され、アタッチメントの特徴による、ストレンジャーへの系統だった反応体系が見られることが示唆された。後に親密な関係を築き得る相手であっても、最初は誰もがストレンジャーなのである。成長していく中で出会う膨大な数のストレンジャーに対しても、こうした個々の持つアタッチメントに関する内的作業モデルが少なからず対人方略を規定していくのであろうと考えられる。(比較発達心理学)